常不軽菩薩の生き方に切り替えよう

【11月12月度の御金言】

世の中ものうからん時も、今生の苦さへかなしし、況んや来世の苦をやと思し食しても南無妙法蓮華経と唱へ、悦ばしからん時も、今生の悦びは夢の中の夢、霊山浄土の悦びこそ実の悦びなれと思し食し合わせて、又南無妙法蓮華経と唱へ、退転なく修行して最後臨終の時を待ちて御覧ぜよ。

【松野殿御返事】（全集1386ｐ）

法華講信条

1，謗法厳戒の信仰を貫こう。（信心）
1，行学絶へなば仏法はあるべからず。（行学）
1，ただ一言でも妙法を伝える勇気を持とう。（破邪顕正）
1，どんなことがあっても憶持不忘の信心を貫こう。
1，現世利益絶対否定の信心をしよう。（示教利喜）
1，成仏大願、菩提心堅固の精進をしよう。
1，御題目を唱える為にこそ生まれてきた自覚を持とう。
1，噂に流されない、人に媚びへつらわない自立した信心をしよう。
1，妙法聞法の縁を大切に求道の信心をしよう。

1

991年2月13日掲揚

☆成仏大願、菩提心堅固の精進をしよう。

仏の教えの究極最上の目的帰着は一切衆生平等成仏であります。

じゃあ、仏に成るとは、どういう事なのでしょうか。悟りを得て、悪心、迷心の煩悩を無くし、全ての道理を理解し、二度と悪心、迷心の煩悩に戻らない、完全無欠仏界だけの生命になる事でしょうか。それは我々凡夫には不可能であります。しかし、法華経以前の教えには、その不可能な教えが当然の如く説かれていて、全ての人々が苦悩し自己否定していました。法華経は、それまでの教えを【四十余年未顕真実】と、全面的に否定し十界互具の成仏を説いています。という事は、信仰が深くなり、だんだん仏に近ずいて来たので、肌がだんだん金色に輝いて来たという様な姿形の問題ではありません。凡夫があるがまま、仏に成る、つまり地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、仏と、仏以下の九界の生命を抱えたまま仏に成る、九界を無くす事は出来ないと法華経は説いているのであります。ですから当然、死んで西方極楽の阿弥陀如来の国土に行けるんだとか、神様の天国に行けるんだという、特定の場所に行く事が成仏ではないのであります。いやいや日蓮大聖人の教えにも死んで霊山で逢おうとか、今月の御書の【松野殿御返事】もそうですが、日蓮が霊山へ案内するとあるじゃ

ないかと考えると思いますが、この霊山は法華経説法の場所に時間空間を超越して法華経の行者として信行し仏になった者は当然集まるという意味で、西方極楽のユートピアの様な事を表現しているのではありません。日蓮大聖人の本質は、寝たきりの身になって、一歩も歩む事が出来なくても、南無妙法蓮華経を信ずるその心を抱く　、その生命が霊山ですよと、成仏は場所では無いと示されているのであります。一度仏になったら凡夫には絶対戻らないとか、死んで、あの場所に行けたら成仏とか、そういう教えは全て爾前迹門方便誘引の教えで、本当の私達の生命に添った成仏ではないのであります。では、どういう状態、状況が成仏なのか。それは、毎日勤行の後や説法の前に唱和している、常不軽菩薩の二十四文字に示されています。【我深く汝等を敬う、敢えて軽慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べしと。】後半の、汝等皆菩薩の道行じてとは、法華経の行者として南無妙法蓮華経の法華経を信行して生きるならば、その姿がそのまま南無妙法蓮華経の仏である。と示されているのであります。まさしく日蓮大聖人、日興上人、日目上人の、どんな弾圧も貧しさも、我が生命に仏の生命が具わっていることを法華経の行者として生きる中に自覚して、苦しい事、悲しい事、辛い事、別れ、裏切り、くやしい事、理不尽な事、差別、罵り、災害、病気、事故等々を乗り越えて生きる凡夫成仏の姿を私達に成仏の手本として示してくれたのであります。とうなったら仏なのかではなく、個々一人一人が、自分なりに法華経の行者として生きる事が成仏の姿そのものなのであります。金太郎飴の様な皆一律同じ姿形で一緒とか、仏様におすがりし救って貰って仏にして貰えるという仏ではなく、千人が千人、万人が万人、全部それぞれ法華経の行者として迷いながらも南無妙法蓮華経を信じ行じ貫いて生きる姿こそが、十界互具の凡夫成仏の仏なのであります。ああでもない、こうでもないと考える必要はないのであります。

☆11月15日は日目上人会【蕪御講】〔七五三〕です。日興上人と共に謗法厳戒の信仰を貫く為、身延離山をされ、大石寺の基礎を日興上人と共に築き、日興上人が重須へ移り35年間毎年鎌倉幕府に国家諫暁をし、生涯42度の国家諫暁をし、建武の中興で一旦朝廷に政権が移った為、病を押して京都朝廷へ天奏に赴いた途上、岐阜県美濃垂井の山中雪に閉ざされた宿において力尽き亡くなられた祥月命日であります。

この日は江戸時代に将軍が子供の成長を祝ったことから世間に七五三として広まりました。日蓮正宗では、七五三が一般的になる以前から、私達の子孫の中から、日目上人の志を者が現われ、日目上人の天奏の途上であった、それを引き継いで天下に南無妙法蓮華経の法を訴える者が現われると言い伝えられて、この日を子供の成長を祝う日と

して大切にして来ました。ただ子供の成長と健康を御祈念するだけで無く。法華経の行者として成長して貰いたい、法灯相続の担い手として成長して貰いたい事を根本として勤行唱題御祈念をして七五三を祝います。三寶院で七五三を願われる方は、前もって申し込みの連絡を下さい。